報　告

地域における動物訪問看護のメリットとデメリット

―動物看護師と獣医師へのインタビューとアンケートから―

Advantages and Disadvantages of Animal/Pet Home Nursing Care in the Community: From Interviews and Questionnaires with One Veterinary Nurse and Two Veterinarians

三井 香奈・宮川－富田 幸子・茂木 千恵
MITSUI Kana　MIYAGAWA-TOMITA Sachiko　MOGI Chie

要　約

近年の動物や飼い主の高齢化、飼い主のライフスタイルの変化に伴い、動物訪問看護の必要性と重要性が増してきている。しかし、訪問看護に関する研究や調査が十分に行われておらず、実態や課題の把握ができていない。そこで、訪問看護経験のある動物看護師、獣医師にインタビューまたはアンケート調査により、訪問看護の役割と課題を明確化するために調査した。訪問看護を行った経験を持つ3名を対象に半構造的面接法またはアンケート調査により得られたデータを質的分析した。その結果、訪問看護のメリットとして動物、飼い主、診察に対しての3項目が、デメリットとして診察、検査、準備に対しての3項目のカテゴリーが抽出された。今後必要なこととして普及啓発、連携した管理、動物看護師の自立の3項目のカテゴリーが抽出された。訪問看護は飼い主と動物のストレスや負担の軽減、丁寧なケアができる一方、予想外の検査や処方は対応しにくいことが分かった。今後は、周りの動物病院との連携や動物看護師と獣医師の訪問看護の分担を明確にすることの重要性が示唆された。

キーワード：獣医師、動物看護師、訪問看護

Ⅰ．はじめに

近年、新しい動物医療のサービスとして猫を専門に診る動物病院や訪問看護を行う個人経営者（獣医師）や動物病院など、動物医療の多様化が進んでいる[1)]。動物病院に来る猫は自宅でいるときよりもストレスをかかえ、血圧、直腸温、心拍数、呼吸数などの生理学的パラメータが高くなるという報告がある[2)]。動物の立場からすると、動物病院ではなく自宅での治療や看護はストレスの軽減が期待できる。さらに、動物や飼い主の高齢化、2019年からの新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大によるライフスタイルの変化に伴い、訪問看護の必要性と重要性が増してきている。花田と宮野（2014）による飼い主アンケート調査では、在宅ターミナルケアの際に訪問看護を希望する飼い主は182名中172名の90％であった[3)]。このように、訪問看護は動物病院とは役割が異なっていることが考えられるが、訪問看護に関する研究や調査が十分に行われておらず、実態や課題の把握ができていない。

本研究では、動物訪問看護を動物看護師や獣医師が飼い主の自宅に訪問して動物の治療や看護を行うサービスと定義し、訪問看護の実態を把握し、その役割と課題を明確化することを目的として、訪問看護経験のある動物看護師、獣医師を対象としたインタビューま

たはアンケート調査を実施した。訪問看護の役割と課題が明らかになれば、訪問看護の安定的な提供と発展へと繋がるだろう。

Ⅱ．方法

1．研究対象

本研究では、訪問看護を行った経験のある専門職として東京都内で勤務している3名の協力を得た。研究対象者は本研究の趣旨を、著者からの口頭または依頼書によって説明を受け、研究参加同意書に記名することによって同意を示した。

2．研究方法

1）データの収集方法

インタビュー調査は2021年12月2、4日の2日間であった。データ収集方法は、研究協力者にインタビュー調査票（全21問）を使用して、質的研究に頻繁に用いられる半構造的面接法により[4]インタビューを行った。研究協力者の希望に応じてビデオ会議によるインタビューまたは対面型インタビューによる調査を行った。インタビュー内容は、協力者の承諾を得て、ビデオ会議によるインタビューでは動画を録画し、対面型では音声を録音して分析対象とした。1名の研究協力者にはインタビューは実施せず、インタビュー調査票をメールで送り、回答および回答に要した時間を求めた。

2）採取するデータ内容

インタビュー調査票には、研究協力者の基礎情報（職業、性別、職歴、訪問看護歴）、訪問看護の実態（ニーズの変化、訪問時のスタッフの人数、実施内容、必要な技術、定期健康診断の進め方、気を付けている事、苦労した事、飼い主からのクレーム内容）、罹患動物の情報（属性、疾病）、訪問看護のメリット／デメリット、および訪問看護のこれから（理想的な訪問看護のシステム、今後必要なこと）に関する設問が含まれた。なお、獣医師に対してのインタビュー時の設問は訪問看護という語句ではなく往診という語句に置き換えて実施した。

3）データの分析方法

録音データと調査票の回答をもとに、質的記述的研究方法による質的分析を行った。分析過程においては内容の妥当性確保に努め、鈴木と八家（2019）[5]を参考にして大分類をカテゴリー、中分類をサブカテゴリーとして扱い、研究協力者の細かい文言をコードとして分類し分析した。

4）倫理的配慮

研究協力者には、収集したデータは本研究以外では使用せず、研究終了後に音源データ、録画データ、および関連資料を破棄することを説明した。論文や学会で発表する際には個人が特定できないように配慮することを約束した。上記個人情報の保護について記載されている研究参加同意書への記名により参加を確認した。

Ⅲ．結果

1．研究協力者の概要

研究協力者の職業は、動物看護師1名と獣医師2名であった（表1）。職業歴は7年～30年で、平均20.6±9.8年であり、訪問看護歴は0年～10年で平均4.3±4.1年であった。1名は「往診を積極的に行う病院に勤めたことがない」ため、訪問看護歴は0年としたが、知人友人経由で年に数回程度の訪問看護の経験はあるとのことだった。インタビューの所要時間は40分程度、アンケートの記入時間は45分程度であった。

2．訪問看護について

ニーズの変化

質問：訪問看護のニーズはどのように変化していますか（始めてから現在まで）。

動物看護師は「コロナ禍になり、予約件数が増加傾向」と答えた。獣医師は「動物病院が近所に増えた、動物が死んでしまったなどで予約件数は減少傾向」ま

表1　研究協力者の基礎情報

	職業	性別	職業歴	訪問看護歴
A	動物看護師	女性	7年	3年
B	獣医師	女性	25年	10年
C	獣医師	女性	30年	0年

たは「特に変化は感じていない」であった。診察内容の変化として、獣医師1名から「ワクチン接種、混合ワクチン、ノミダニの予防から現在は認知症、介護、安楽死、看取りの依頼などが出てきた。飼い主のかかりつけの動物病院に往診が1つの選択肢になっている」との情報が得られた。

訪問時のスタッフの人数

質問：訪問看護時の人数（獣医師・動物看護師）を教えてください。

3名ともに、「獣医師1名での訪問機会が多い」と回答した。その他に動物看護師は、「2名（獣医師、動物看護師）」、獣医師は「2名（獣医師）」であった。

実施内容

質問：訪問看護の実施内容は何ですか。

3名で共通していた内容は、「病状観察、処置（皮下補液、褥瘡の管理、注射、採血）」であった。動物看護師と獣医師の2名で共通していた内容は「処置指導、食餌指導（肥満）、グルーミングケア（毛玉とり、爪きり、肛門腺しぼり）、口腔内ケア（歯磨き）、マッサージ、排便/排尿処置、トレーニング指導、動物病院や火葬場への搬送」であった。他には動物看護師は「エコー検査、フード販売」と回答した。

必要な技術

質問：訪問看護で必要な技術は何ですか。

動物看護師と獣医師の2名で共通していた内容は、「獣医師の補助ができること」「獣医師への気遣い、検査の補助」といった獣医師へのサポートであった。他には、動物看護師は、「保定技術、人とのコミュニケーション、身だしなみやマナー、場を和ませること」、獣医師は、「対応力（次に何を行うのかを見極めて行動し、準備すること）」または「単独で行うこと」であった。

定期健康診断の進め方

質問：定期健康診断をクライアントに進める際にどのような言葉で誘導しますか。

獣医師は「フィラリア時期にお知らせする、往診時に全部健診する（尿検査で異常があれば勧めることが多い）」または「年1回は健診を受けている様な年齢になりましたよとお誘いする」と回答し、動物看護師は「メール・ハガキで通知（手書き）、精算のときに直接お誘いする」と回答した。

気を付けている点

質問：訪問看護で気をつけていることは何ですか。

獣医師2名で共通していた内容は、「要望を聞いて受け入れる」または「飼い主の話を聞く」といった飼い主の話を聞くことであった。他には、動物看護師から「マナー（靴を揃える、ドアの前でお辞儀）、消毒等の配慮を見せる、言葉遣い、物品を静かに置く、人の家にお邪魔していることを意識する」、獣医師から「できる範囲を飼い主にお伝えする（かかりつけの病院との違いを伝える）、時間に遅れないこと、訪問看護の限界を早めに判断する」という回答が得られた。

苦労した点

質問：訪問看護で苦労したことは何ですか。

獣医師2名で共通していた内容は、「一人での採血が困難であった」または「玄関が暗くて採血ができない」といった採血の問題と、動物看護師と獣医師の2名では「保定の技術が高度である」「飼い主の保定では安心できない」といった保定の問題であった。他には、動物看護師から「処置台がないので、動物種（猫）によっては保定しづらい、他の動物がきたとき（ハプニング）の対応」、獣医師から「特殊な飼い主（ゴミ屋敷など）の対応」という回答が得られた。

飼い主からのクレーム内容

質問：訪問看護でクレームをもらったことはありますか。

動物看護師と獣医師の2名が「経験なし」と回答した。他には、獣医師1名から「処置後の針を落として、犬が遊んでいた所を飼い主が見つけたこと、動物の病気を他の飼い主（友人同士）へ漏らしてしまったこと」という回答が得られた。

3. 罹患動物について

属性

質問：どのような罹患動物・飼い主の利用が多いですか？

動物看護師と獣医師の2名で共通していた内容は、「犬猫が9割だが、最近は猫が多い」「犬猫中心だが、

リモートワークで猫が多くなってきた、若い飼い主は猫が多い」といった猫の罹患動物が多いという回答であった。他には動物看護師は「高齢の動物、飼い主または財力がある若い飼い主（仕事で忙しい人）」、獣医師は「高齢（60代、70代）の飼い主が多い、動物の年齢は様々」または「病院にくることがストレス、病院に行くことができないほど重症」であった。

疾病

質問：どのような症例の利用が多いですか？（多い順に3つ挙げてください）

動物看護師と獣医師の2名で共通していた内容は、「腎臓疾患」であったが順位は違っていた。動物看護師は「1循環器系疾患、2健康管理ケア（爪切りなど）、緊急対応、3腎臓疾患」、獣医師は「1消化器疾患（嘔吐・下痢）、2皮膚疾患、外耳炎、3関節の疾患（足、腰）」または「1内分泌系、2腎臓疾患、3老齢」といった様々な内容であった。

4. 訪問看護のメリット

質問：訪問看護のメリットは何だと思いますか。

訪問看護のメリットとして抽出されたコードは10項目、サブカテゴリーは6項目、カテゴリーは3項目であった。表2に研究協力者が答えた内容であるコード、コードをまとめた中分類のサブカテゴリー、さらに大分類のカテゴリーを示した。

メリットの3項目のカテゴリーは、動物、飼い主、診察に対してであった（表2）。動物に対しては、ストレスの軽減、本来の姿の2項目のサブカテゴリーから構成された。ストレスの軽減を導き出したのは、「動物の負担が少ない」「診察台がないため動物の緊張がほぐれる」「高齢動物や猫に良い」であった。本来の姿を導き出したのは、「日常の姿が見られる」であった。飼い主に対しては、負担の軽減、診察時間の2項目のサブカテゴリーから構成された。負担の軽減を導き出したのは、「飼い主の負担が減る」「高齢者に良い」であった。診察時間を導き出したのは、「飼い主のライフスタイルに合わせられる」「時間のない飼い主に良い」であった。診察に対しては、緊急時の対応、丁寧なケアの2項目のサブカテゴリーから成る。緊急時の対応を導き出したのは、「大型犬の緊急に良い」であった。丁寧なケアを導き出したのは、「動物の飼育環境が見られるので診察では分からない細かい指導ができる」であった。

5. 訪問看護のデメリット

質問：訪問看護のデメリットは何だと思いますか。

訪問看護のデメリットとして抽出されたコードは11項目、サブカテゴリーは8項目、カテゴリーは3項目であった。

デメリットは、診察、検査、準備に対しての3項目のカテゴリーであった（表3）。診察に対しては、技術面、処置、費用の3項目のサブカテゴリーから構成された。技術面を導き出したのは、「診察台がないため、保定が難しい」であった。処置を導き出したのは、「点滴などすぐに対応できない場合がある」「2名以上でも救急救命処置、胸水、腹水抜去、尿閉解除、抗癌化学療法は厳しい」であった。費用を導き出したのは、「来院よりも費用がかかる」であった。検査に対しては、検査結果、検査内容の2項目のサブカテゴリーから構成された。検査結果を導き出したのは、「すぐに結果がでない場合がある」であった。検査内容を導き出し

表2　訪問看護のメリット

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
動物に対して	ストレスの軽減	「動物の負担が少ない」 「診察台がないため動物の緊張がほぐれる」 「高齢動物や猫に良い」
	本来の姿	「日常の姿が見られる」
飼い主に対して	負担の軽減	「飼い主の負担が減る」 「高齢者に良い」
	診察時間	「飼い主のライフスタイルに合わせられる」 「時間のない飼い主に良い」
診察に対して	緊急時の対応	「大型犬の緊急に良い」
	丁寧なケア	「動物の飼育環境が見られるので診察では分からない細かい指導ができる」

たのは、「超音波ができない」「画像診断全般、膀胱穿刺による採尿は院内よりも劣る」であった。準備に対しては、入院、処方、器具の3項目のサブカテゴリーから構成された。入院を導き出したのは、「すぐに入院できない場合がある」であった。処方を導き出したのは、「薬の準備が大変」「すぐに処方できない場合がある」であった。器具を導き出したのは、「器具の準備が大変」であった。

6. 訪問看護のこれから

理想的な看護システム

質問：理想的な訪問看護システムとはどのようなものだと思いますか。

理想的な看護システムとして抽出されたコードは7項目、サブカテゴリーは5項目、カテゴリーは4項目であった。

理想的な看護システムの4項目のカテゴリーは、利用者の拡大、丁寧な診察、高度な技術、連携した管理であった（表4）。利用者の拡大は、訪問看護の周知のサブカテゴリーから構成された。訪問看護の周知を導き出したのは、「色々な飼い主や罹患動物に利用してもらう」であった。丁寧な診察は、丁寧なケア、予防医療の2項目のサブカテゴリーから構成された。丁寧なケアを導き出したのは、「病院と家族との中間で診察ができる」「病院ではできないが、獣医師に相談したいことなどが対応できる」であった。予防医療を導き出したのは、「獣医師と直接ゆっくりと話せる時間が多いので、予防医療には向いている」であった。高度な技術は、より適切な処置のサブカテゴリーから構成された。より適切な処置を導き出したのは、「訪問看護用の自動車（小型病院）があればより適切な処置ができる」であった。連携した管理は、動物病院との連携のサブカテゴリーから構成された。動物病院との連携を導き出したのは、「往診、訪問医療、訪問看護それぞれがうまく機能すること」「がん罹患動物など自宅での介護を訪問看護師がフォローする」であった。

表3　訪問看護のデメリット

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
診察に対して	技術面	「処置台がないため、保定が難しい」
	処置	「点滴などすぐに対応できない場合がある」 「2名以上でも救急救命処置、胸水、腹水抜去、尿閉解除、抗癌化学療法は厳しい」
	費用	「来院よりも費用がかかる」
検査に対して	検査結果	「すぐに結果がでない場合がある」
	検査内容	「超音波ができない」 「画像診断全般、膀胱穿刺による採尿は院内よりも劣る」
準備に対して	入院	「すぐに入院できない場合がある」
	処方	「薬の準備が大変」 「すぐに処方できない場合がある」
	器具	「器具の準備が大変」

表4　理想的な訪問看護システム

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
利用者の拡大	訪問看護の周知	「色々な飼い主や罹患動物に利用してもらう」
丁寧な診察	丁寧なケア	「病院と家族との中間で診察ができる」 「病院ではできないが、獣医師に相談したいことなどが対応できる」
	予防医療	「獣医師と直接ゆっくりと話せる時間が多いので、予防医療には向いている」
高度な技術	より適切な処置	「訪問看護用の自動車（小型病院）があればより適切な処置ができる」
連携した管理	動物病院との連携	「往診、訪問医療、訪問看護それぞれがうまく機能すること」 「がん罹患動物など自宅での介護を訪問看護師がフォローする」

今後必要なこと

質問：その理想のために訪問看護が今後、必要なことは何でしょうか。

訪問看護の今後必要なこととして抽出されたコードは9項目、サブカテゴリーは5項目、カテゴリーは3項目であった。訪問看護の今後必要なことのカテゴリーは、普及啓発、連携した管理、動物看護師の自立であった（表5）。普及啓発は、訪問看護の周知のサブカテゴリーから構成された。訪問看護の周知を導き出したのは、「訪問看護の認知度を高めること」「配布物を増やす」「動物医療でも訪問看護が一般的になれば、動物のストレスも減って、もっと気軽に在宅医療をおこなうことができる」であった。連携した管理は、動物病院との連携のサブカテゴリーから構成された。動物病院との連携を導き出したのは、「まわりの病院との連携」「がん罹患動物に自宅での介護が必要なときにフォローするなどの連携が必要」であった。動物看護師の自立は、罹患動物の介護、技術面、社会的な地位の3項目のサブカテゴリーから構成された。罹患動物の介護を導き出したのは、「がん罹患動物などは動物看護師と獣医師で分担できるかもしれない」であった。技術面を導き出したのは、「国家資格によって皮下点滴や注射、または採血を愛玩動物看護師が施行して良いと認められることで単独訪問の価値はある」「動物看護師のみで検温、血圧測定、心拍数など主観の入らない検査を可能にすること」であった。社会的な地位を導き出したのは、「愛玩動物看護師の社会的地位と認識がより確立できれば、単独訪問を受け入れてもらえるのではないか」であった。

Ⅳ．考察

訪問看護の実態について

ニーズの変化に関する回答では、獣医師2名で訪問看護の予約数は変化していない、または減少傾向となっていた。これは、診察の予約方法が知人経由である、近所に来院できる動物病院が増えたなどの環境要因が影響している可能性が考えられた。診察内容の変化として、ワクチン接種、混合ワクチン、ノミダニの予防から現在は認知症、介護、安楽死、看取りの依頼など幅広い業務が求められていることが分かった。

訪問時のスタッフの人数は、3名ともに獣医師1名での訪問が多いことから、現状は動物看護師の単独訪問はないことが分かった。処置や検査の補助が必要な場合のみ、動物看護師や獣医師の2名体制で行くようであったが、動物看護師のみでできる業務が少ないこと、またはニーズが少ないことが示唆された。

3名で共通していた内容は、「病状観察、処置（皮下補液、褥瘡の管理、注射、採血）」であった。主に診察や治療をメインに動いていることが分かった。また、動物看護師と獣医師の2名で「処置指導、食餌指導（肥満）、グルーミングケア（毛玉とり、爪きり、肛門腺しぼり）、口腔内ケア（歯磨き）、マッサージ、排便あるいは排尿処置、トレーニング指導、動物病院や火葬場への搬送」が共通していたことから、健康管理ケア、処置、食事、トレーニング指導に加えて動物病院や火葬場への搬送などの丁寧なサービスをしていることが分かった。花田と宮野（2014）[3]の在宅訪問の

表5　今後必要なこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
普及啓発	訪問看護の周知	「訪問看護の認知度を高めること」 「配布物を増やす」 「動物医療でも訪問看護が一般的になれば、動物のストレスも減って、もっと気軽に在宅医療をおこなうことができる」
連携した管理	動物病院との連携	「まわりの病院との連携」 「がん罹患動物に自宅での介護が必要なときにフォローするなどの連携が必要」
動物看護師の自立	患者の介護	「がん罹患動物などは動物看護師と獣医師で分担できるかもしれない」
	技術面	「国家資格によって皮下点滴や注射、または採血を愛玩動物看護師が施行して良いと認められることで単独訪問の価値はある」 「動物看護師のみで検温、血圧測定、心拍数など主観の入らない検査を可能にすること」
	社会的な地位	「愛玩動物看護師の社会的地位と認識がより確立できれば、単独訪問を受け入れてもらえるのではないか」

実施内容とほぼ同じであったが、本調査では「処置指導、食餌指導（肥満）、トレーニング指導、動物病院や火葬場の搬送、エコー検査、フード販売」なども実施内容に含まれた。動物看護師と獣医師の2名で共通していた必要な技術は「獣医師の補助ができること」「獣医師への気遣い、検査の補助」といった獣医師へのサポートであったことから、動物病院での動物看護師の役割と同じであることが分かった。しかし、訪問看護では保定技術、対応力、単独で実施するための高い技術力、クライアントとの対話、身だしなみやマナーなどのコミュニケーション能力や礼儀なども必要となってくるので、職歴が浅いと厳しいことが考えられた。既に人間の看護師の訪問看護では看護師が単独で実施している。その際、症状観察判断・フィジカルアセスメント能力、疼痛緩和などの知識、家族指導、療養者・家族の意向を確実に読み取る力、家族の自己決定を支援する能力などが求められる能力として挙げられている[6]。今後、動物看護師にも必要となってくる可能性があると考えられた。

定期健康診断の進め方については3名ともに様々であったが、メールまたはハガキでの通知、あるいは口頭で勧誘の2種類の方法が示された。口頭で勧誘する際に、対象動物の年齢やフィラリア予防の推奨時期といった情報のみを提供しており、健診を受けることのメリットに関する具体的な情報が不足していることが考えられた。氏政（私信）によると、最も金額の高かった2017年と2020年を比較した場合には、集計方法に違いはあるが、犬猫ともにワクチン・健康診断の予防費は上昇しているものの、治療費はマイナスになっている。その点から病気の早期発見は動物医療費削減効果もあるといえるかもしれないという見解が得られた[7]。気を付けている事は、獣医師2名で共通していた内容は、「要望を聞いて受け入れる」「飼い主の話を聞く」といった飼い主の話を聞くことであった。加えて「マナー、言葉遣い」「できる範囲を飼い主にお伝えする、時間に遅れないこと、訪問看護の限界を早めに判断する」などが挙げられたことから礼儀やマナーの実践を心がけていること、および訪問看護の罹患動物の状態を見極め、動物病院の受診を指示する時期を誤らないよう気を付けていることが示された。

苦労した点として、協力者のうち2名が共通して回答した内容は、採血および保定に関する問題であった。これらを解決するために、LEDライトやエリザベスカラー、口輪などを利用しているようであった。他には、「他の動物がきたとき（ハプニング）の対応」「特殊な飼い主（ゴミ屋敷など）の対応」なども示されており、訪問看護は現場で臨機応変に対応する能力が求められることが示唆された。訪問看護のリスクとして、人の訪問看護では患者以外にも医療機器関連（故障など）、家族（虐待など）、その他（サービス中の盗難・紛失、プライバシーが守れないなど）が挙がっていた[8]。今後、動物の医療現場でも対策が必要かもしれない。飼い主からのクレームに関しては、動物看護師と獣医師の2名でクレーム経験がなかった。獣医師1名は、「処置後の針を落として、犬が遊んでいた所を飼い主が見つけたこと、動物の病気を他の飼い主（友人同士）へ漏らしてしまったこと」と回答した。訪問時は動物に処置を行う際の安全管理が病院とは異なるスキルを要することが示唆された。処置後の管理は動物看護師が実施できる範疇であり、獣医師との2名体制で訪問することで防げるように考えられた。また、個人情報の厳格な管理が求められていることが分かった。

罹患動物について

動物看護師と獣医師の2名で共通していた内容は、「犬猫が9割だが、最近は猫が多い」「犬猫中心だが、リモートワークで猫が多くなってきた、若い飼い主は猫の飼育が多い」といった猫の罹患動物が多いと答えたことから、猫の飼い主は犬の飼い主に比較して訪問看護を求めることが多いことが示唆された。疾病は、緊急対応、循環器系疾患、内分泌系などが挙げられており、定期的な診察および投薬が必要となる症状であった。加えて健康管理ケア、老齢などの理由で訪問看護を利用していることが分かった。

訪問看護のメリット

抽出されたカテゴリーは、動物、飼い主、診察に対しての3項目のカテゴリーであった。サブカテゴリーに含まれるストレスの軽減、本来の姿から表される動物に対しては、動物病院では見られない動物のリラックスした状態が期待でき、動物種によっては、痛みを隠しやすいので普段の様子が見られることは良い点だと評価していた。負担の軽減、診察時間から表される飼い主対しては、動物病院よりも訪問看護は飼い主のライフスタイルに合わせられる点を高く評価している

と考えられた。緊急時の対応、丁寧なケアから表される診察に対しては、移動に負担のかかる大型犬の診察や動物病院では得られない細かな情報を訪問看護では得られることを評価していた。看護ケアの重要性は、罹患動物のニーズに個別に対応、罹患動物のケアについて教育する関係を飼い主と築くことであるといわれるように[9]、動物に対してのストレスの軽減、本来の姿と診察に対しての丁寧なケアはニーズに対応するために重要と考えられた。

訪問看護のデメリット

デメリットとして抽出されたコードとカテゴリーは、メリットとほぼ変わらなかったが、サブカテゴリーでは8項目のサブカテゴリーがあった。抽出されたカテゴリーは、診察、検査、準備に対しての3項目のカテゴリーであった。サブカテゴリーの技術面、処置、費用から表される診察に対しては、訪問看護での処置の限界や緊急時の対応の遅れ、費用が動物病院よりも高くなることを懸念していた。診察台がないことはメリットでも挙げられていたが、デメリットにも挙げられたので、状況や治療内容によって適・不適が分かれると考えられる。検査結果、検査内容から表される検査に対しては、動物病院とは違って訪問看護は検査結果をすぐに飼い主に渡せない場合があること、検査内容が限られる、手技が劣るなどが挙げられた。入院、処方、器具から表される準備に対しては、緊急時の対応が遅れることや訪問時に予想外の処方や検査のときに準備ができないことを挙げていた。訪問前に飼い主から情報を得て、準備をするものの、それだけでは不十分な場合があることが考えられた。

人の訪問看護を利用した介護者のインタビュー調査では、訪問看護の悪い点として看護師の言葉遣い・態度、不十分な技術に関連したことが多かった[5]。本調査では、不十分な技術が診察に対しての技術面、処置、検査に対しての検査内容に関連していると考えられた。

訪問看護のこれから

理想的な看護システムとして抽出されたカテゴリーは、利用者の拡大、丁寧な診察、高度な技術、連携した管理の4項目であった。サブカテゴリーの訪問看護の周知から表される利用者の拡大は、利用者の幅を広げもっと多くの飼い主に利用してもらいたいとのことを表し、必要な罹患動物への適切な情報提供が重要と考えられた。丁寧なケア、予防医療から表される丁寧な診察は、動物病院よりも訪問看護は獣医師と飼い主が話す時間の確保ができることや動物病院と飼い主の中間的な存在として予防医療などにも活用してもらうことを挙げていた。より適切な処置から表される高度な技術は、訪問看護用の自動車（小型病院）があれば緊急時などにも対応できると期待していた。動物病院との連携から表される連携した管理は、獣医師と動物看護師の連携や重度の罹患動物へ訪問看護の限界があり病院の来診を促すこと、あるいは退院後に自宅で看護するという自宅介護までの流れの連携を挙げていた。

今後必要なこととして抽出されたカテゴリーは、普及啓発、連携した管理、動物看護師の自立の3項目であった。訪問看護の周知から表される普及啓発は、訪問看護の認知度を高めることや訪問看護が一般的な選択肢の1つになることを期待していると考えられた。動物病院との連携から表される連携した管理は、周りの動物病院との連携で訪問看護から重度の罹患動物を紹介することはあるが、反対に動物病院から重度の罹患動物のフォローを紹介されることがないという連携不足の現状が考えられた。罹患動物の介護、技術面、社会的な地位から表される動物看護師の自立は、動物看護師と獣医師の訪問看護での分担を明確にし、動物看護師のみで実施できる検査や業務を確立することで動物看護師単独での訪問が可能になること、さらには動物看護師の社会的な地位の向上に繋がると考えていることが分かった。

まとめ

訪問看護の経験者から訪問看護のメリット、デメリット、これからについてインタビューまたはアンケート調査により訪問看護の役割と課題を明らかにした。メリットとして動物、飼い主、診察に対して、デメリットとして診察、検査、準備に対してのそれぞれ3項目のカテゴリーが抽出された。今後必要なこととして、普及啓発、連携した管理、動物看護師の自立の3項目のカテゴリーが抽出された。これらは、今後、発展する訪問看護のケアの質の向上に繋がることが示唆された。

本研究は、訪問看護経験をした動物看護師、獣医師

の3名のみを対象としたが、過去の訪問看護についての研究が少ない点で、理論的および実践的で有意義な示唆を得ることができた。今後さらに調査対象を広げると同時に、定量的調査の実施も必要となるだろう。

令和4年の愛玩動物看護師法の施行により、国家資格を有する愛玩動物看護師が訪問看護で活躍できる業務、機会が増えることを大いに期待したい。

謝辞

本研究にあたり、調査にご協力いただきました研究協力者の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

1） 奥田順之（2018）ペット産業CSR白書～生体販売の社会的責任～，特定日非営利活動法人　人と動物の共生センター，p.9.

2） Quimby, J.M., Smith, M.L. (2011) Evaluation of the effects of hospital visit stress on physiologic parameters in the cat, Journal of Feline Medicine and Surgery, vol. 13, pp.733–737.

3） 花田道子，宮野のり子（2014）在宅看護への統合医療導入の有用性 — 看護計画の検討と動物看護師のかかわり方 —，Veterinary Nursing, vol.19, pp.1–8.

4） ホロウェイ＋ウィーラー（2019）ナースのための質的研究入門，監訳：野口美和子，医学書院，p.81.

5） 鈴木千絵子，八家直子（2019）訪問看護を利用した介護者が感じる訪問看護師の良い点と悪い点 — 在宅で看取りをした家族へのインタビューから —，姫路大学大学院看護学研究科論究，第3号，pp.55–65.

6） 中村順子（2021）第5章療養者の理解と在宅看護のポイント，8節終末期にある療養者の理解と在宅看護のポイント，家族看護を基盤とした在宅看護論，監修：渡辺裕子，日本看護協会，p.287.

7） アニコム損害保険株式会社，アニコム家庭どうぶつ白書（2019年度より集計方法に変更あり）https://www.anicom-page.com/hakusho/【2022年1月5日閲覧】

8） 渡辺裕子（2021）序章 在宅看護とは何か，3節在宅看護の機能と役割，家族看護を基盤とした在宅看護論，監修：渡辺裕子，日本看護協会，p.23.

9） Ballantyne, H. (2018) Veterinary Nursing Care Plans Theory and Practice, CRC Press, p.7.

Advantages and Disadvantages of Animal/Pet Home Nursing Care in the Community: From Interviews and Questionnaires with One Veterinary Nurse and Two Veterinarians

MITSUI Kana, MIYAGAWA-TOMITA Sachiko, MOGI Chie

Abstract

With the recent changes in lifestyle and subsequent ageing of owners and their animals, the need and importance of home nursing care has also increased. However, there is a dearth of research on home nursing because of which the actual situation has not been fully understood. Therefore, we decided to clarify the roles and address the issues of home nursing by conducting a questionnaire survey as well as semi-structured interviewing with experienced one veterinary nurse and two veterinarians in the field. A qualitative analysis was performed on the data obtained from a sample of three. As a result, three categories were extracted as the advantages of home nursing for animals, owners, and medical examinations, and three categories were extracted as the disadvantages for medical examinations, tests, and preparation. The three categories were identified as necessary in the future: awareness-raising, coordinated management, and independence of veterinary nurses. While home nursing can provide considerable care and reduce the stress and burden on owners and animals, it was found that it is difficult to handle unexpected tests and prescriptions. Based on the findings of this study, it was suggested that in future it would be beneficial to collaborate with veterinary hospitals in the vicinity and to clarify the division of responsibilities between veterinary nurses and veterinarians in home nursing.

Key words: Animal/ pet home nursing care, veterinarians, veterinary nurse